魔物娘図鑑被害報告 Case:Automaton

機械仕掛けの女の子

DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の購入・閲覧禁止

◇機械仕掛けの女の子

永年の月日を経てぼろぼろに風化した石造りの壁を橙色の松明の灯りがぼうっと照らす。
鼻につんとくるホコリとカビの匂いは、近隣の集落の住人に「見捨てられた遺跡」と呼ばれた場所の地下に隠されていたこの施設が永らく使われていない証拠だ。
壁は現在使われている文字とは似ても似つかない古代文字と、人間とも魔物とも似てもにつかない存在が描かれた理解に苦しむような壁画でびっしり埋め尽くされ、一層不気味さを増している。
この階層はおそらく他の冒険者は未踏の領域だろう、盗掘の形跡がないし、なによりここまで到達するには魔導機械に精通するラクランにしか解けないような難解な仕掛けを攻略する必要があった。
「なんだ、これ……？」
ラクランは呆気にとられていた。
遺跡の最奥部の小部屋に隠されていた遺物は、ラクランの期待に対してあまりに突拍子もないものだった。
「へい旦那ァ、なに腑抜けた顔して突っ立ってんでさァ？」
「あ、ああ……これを見てくれ」
国でも有数の機械工と称されるラクランがわざわざ遺跡なんかに足を運んだのは他でもない、現代の機械工が全員束になった所で辿り着けそうにないほどに進歩した先史文明の超技術の手掛かりを掴んだからだ。どうせ見つけるのなら祖国のために役立ちそうなもの、できれば兵器や動力源、欲を言えば理論書や設計図が理想だった。
だが、これは、どう見たって――――――
「どデカい機械人形ですかい？気味が悪ィ、なんでこんなもん…」
「待て、気安く手を触れるのはよしてくれ」
ぱしと手をはたきおとすと、連れの男はへいへいと不服そうに身を引いた。素手でべたべたと触ろうとしたのかと思うとぞっとする。
連れの男の名はドレスデン、ラクランがギルドで護衛用に雇った用心棒だ。
筋肉質で大柄、肌寒い地方の地下遺跡の攻略に鎖帷子１枚に大斧を担いで来るという、がさつを絵に描いたような、あらくれ同然の男だった。
短く刈り上げた頭と特徴的な泥棒ヒゲの風貌はいかにも荒事に向いていそうなタイプで、確かに護衛系の依頼の実績は十分だった。
ただ、雇ったはいいがドレスデンはこの性格なので、繊細な職業のラクランとは全く馬が合わないのだった。

「旦那が見てくれって言ったんじゃねェかよォ」
「だからって触ってくれとは言ってない、やっぱり落ち着かないからそこで休んでいてくれないか」
「ヘェ」
言って地べたにどっかと座り、退屈そうにたっぷり蓄えた泥棒ヒゲをじょりじょりといじり出す。
（やはり護衛で金なんてケチるべきじゃなかったかな……）
ラクランは護衛に大枚はたく余裕なんてなかったにしろそう思った。
さて、とごそごそ雑嚢をまさぐるとラクランは中から一組の綿手袋を取り出し、ぎゅっと手にはめ込む。
やっと見つけた先史文明の遺産だ、功を焦ってはいけない、慎重に、この機械人形が一体なんのために、どんな技術で作られたのか、探り出さなくては。
努めて冷静になろうとするも、超技術の結晶を目前にしているという事実に、ラクランの鼓動はばくばくと高鳴っていた。

◇◆◇◆◇

　その機械人形は、不思議なことに年頃の少女を象って造られたようだった。
手を胸の前でクロスさせる神秘的な佇まいはまるでおとぎ話に出てくる眠り姫のようだ。
深窓の令嬢を思わせる儚げで端麗な顔立ちは、人形趣味などないラクランでさえもが息を呑んでしまうほどに美しい。
つややかなセミロングの銀髪にはシルクのような透明感があり、まるでこの機械人形の周りだけ、ボロボロに風化した古代遺跡から切り取られたかのようだ。
だが、その少女らしい美しさと相反して、肘や膝などの関節には軸と回転機構による可動部があり、やはりこれが一種の機械人形であることに間違いはなさそうだ。
額に美しく青い宝玉がはめ込まれていたり、分厚い金属のスカートらしきものを身につけていたり、耳のような尖った装甲が生えていたり、ところどころに歯車が露出していたりと不可解な点が見れば見るほどにたくさんある。
（なんで古代人はこんなもの…？）
どれ、とその雪のように白い身体に手を触れる。
「……！？」
見た目から陶磁のような感触を予想していたら、表面は想像以上にきめ細かい、しっとりしているとすら感じ

る。
少女に触れたことなんて一度もないが胴のくびれはまるで本物の少女のように華奢かつ繊細だ、指を這わせながらラクランは思わずごくりと唾を飲み込んでしまった。
ラクランはいかがわかしいことをしているわけじゃない、と自分に言い聞かせながらも、なにかに目覚めてしまいそうな自分を否定できそうになかった。
「…っ……集中、集中だ…！」
ラクランはごしごしと目をこすり気を取り直す。
見た目、表面は素肌そっくりでも材質は硬い、やはり白磁か石膏かなにかを加工して作られているのだろうか、いや魔界産の素材の可能性も捨てきれない。
ラクランは職業柄錬金術や冶金術を修めていたがついに思い当たることはなかった、なにしろその素材を生成する技術はこの世界から失われて久しいのだから。
ふと、ラクランの目に人形の控えめに膨らんだ乳房が衣服状の装甲からくり抜かれ露出しているのが飛び込んだ。
なんとはなしに手をのばすと――――――
「プっハハハハッ！！いい趣味してらァ、機械にゾッコンの旦那らしい！」
ラクランは野太い笑い声に背筋をびくりとさせて振り返る、すぐ後ろからドレスデンが覗いていたらしい。
ラクランの姿をゲラゲラと腹を抱えて嘲笑っている、それだけでも鬱陶しいのにもう一方の手では酒瓶を握っていた、退屈に耐えかねたのか酒を空けてしまったようだ。
「お、俺は、素材を調べていただけだ…！」
「ククっ…素材ねェ…わかったら旦那用にもう一個お人形さんをこさえようってワケだァ！ぶぁはははは！！」
ラクランは羞恥で顔がぼっと赤くなった、依頼人になんつう態度だ、だからコイツは苦手なんだ。
「残念だが俺に人形趣味なんかない」
一通り分析を終えるとラクランはぱん、と膝を土埃を払って立ち上がる。ここでできそうなことはもうあらかた済んだ。
「どこか安全な場所に持ち帰って調べたい…装甲ならちょっとやそっとじゃ壊れそうにないから、運び出すのを手伝ってくれないか」
「任せときなァ……ふんんヌッ！！」
がぶり、と酒を煽ってから肩の装甲部を掴むと、ドレスデンは渾身の力で人形を壁から引っこ抜こうとした。しかしギギギ、と鈍い音が鳴るだけで機械人形はビクともしない。想像以上に頑丈なようだ。
「ハァ、ハァ…だァクソぉ、参ったな旦那、こりゃあぶち壊して持ち帰るしかないんじゃねェですかい？」

「いちいち考えることが短絡すぎるんだよお前は…」
ラクランはため息をついた、どうしてそうすぐに破壊という結論に至れるのか。
さて、もしこの人形が壁に固定されているのだとしたら、それを解く仕掛けがどこかにあるはずだ、壁に書かれた古代文字はヒントなのかもしれない。遺跡攻略で頭を使うのはラクランの仕事だ。
ぐるぐるとそこらを歩き回りながら思案する、考え事をするときに意味もなくその場をうろうろするのはラクランの癖だった。
「んーむむむ……ん？」
ふと気づく。
「なぁ、今あの人形、こっち見てなかったか？」
「おっかねェこと言うなあ旦那ァ、このドレスデンをビビらせようたってそうはいかねェ」
「お前をビビらせて俺になんの得があるんだ」
見直すと、人形は何事もなかったかのように瞳を閉じている、気のせいだろうか？
「おかしいな…」
ラクランは訝しく思い、人形に歩み寄ってそのやたら端正な顔を覗き込む。
ぱちり
目が、合った。

深海のように深く、吸い込まれるような紺碧の瞳。
まるで作り物とは思えない、もしかしたら潤んでたりするんじゃないか、一体どんな技術を使えばこんなに美しい輝きが出せるのだろう。
ラクランは釘付けになっていた、なので、人形の手が知らず知らずの内にラクランの顔に延びていることに気づかなかった。
「下がってろ旦那ァ！！」
「んなッ――――！」
気づいたドレスデンはラクランの首根っこを掴むと、ぶぅんと豪快に後ろに投げ飛ばした、ラクランの方は受け身を取れずに固い石床に身を打ち付けてしまう。
腐っても幾つもの戦場を切り抜けてきただけあるらしく、こと荒事の気配となるとドレスデンの判断は早い、というか早すぎるし雑すぎる。
「ゴホ、ゴホッ…！……少しは、加減を、覚えろっての――！」
ラクランは悪態をつきながら床に手をつき体勢を直す、今ので思い切り埃を吸い込んでしまった。
「……」
「な……！」
みれば例の機械人形が立ち上がっているではないか、いやよく目を凝らせば立っていない、つま先は地について

いない、ぷかぷかと宙に浮遊している。
それに人形の肘や身体のそこここにある歯車は等速でくるくる回転を始めている、信じられないことだが、起動してしまった、ということに違いなかった。
「……」
なにを考えているかわからない紺碧の瞳がじっとラクランを射抜く。それからドレスデンを一瞥し、ラクランに再び視線を戻した。
ラクランは2つの最悪の展開を思い浮かべていた。
ひとつはこの人形が戦闘を目的に作られていた場合。基本的にラクラン達は遺跡の侵入者である以上排除対象に当たると考えるべきだろう。
こちらに戦闘要員はドレスデンしかいない。だから相手が古代技術の粋を尽くして出来た兵器だとすれば絶対に歯が立たない、撤退を余儀なくされる。
もうひとつは……
「旦那ァ…！」
ドレスデンの顔にニヤリと野蛮な笑みが浮かぶ、それとともにラクランの額にはじわじわと冷たい汗が吹き出してくる。
「やっぱし大冒険の締めくくりってェのはよォ…こうでなくっちゃあよォ…！」
もうひとつの最悪の事態は、考えるより先に手が出るタイプのこの用心棒が、先史文明の残した遺産であるところの機械人形をばらばらに粉砕してしまうことだ。
ドレスデンはぱきぱきと指を鳴らすと、背中から柄が背丈ほどもある戦斧をずる、と取り出し、前傾姿勢をとって筋骨隆々の両腕にどっしり構える。
「待て待て待て、俺がなんとかする、なんとかするから待ってくれお願いだから！！」
「おいおい旦那ァ、女型の人外はみんな人食いだからぶっ殺せって習わなかったのかよォ…！？」
「コイツは例外だ！この機械人形を持ち帰るのがこの冒険の目当てなんだ、黙って退いてくれ！」
「ああもうごちゃごちゃうっせェ依頼人だな…まずぶっ壊す、それから持って帰る、それが一番簡単だろうがよォ…！」
目を赤く充血させたドレスデンはふしゅうと鼻息を鳴らした。
ドレスデンの戦闘スタイルは戦士というより狂戦士に近い、一旦戦闘の気配を察したら最後、「攻撃」以外の選択肢がなくなってしまう。
「おぅるァアアアアァァァアアアア！！！」
ドレスデンは遺跡中に響き渡るような野太いウォークライを上げ、大斧で機械人形の胴体を大振りに一薙ぎしようとした。

機械人形はそれをふわりと水面を滑るように躱すと、空振りした大斧がずん、と石床を砕き破片が舞い、衝撃に遺跡がびりびりと揺れた。
ちゃんと避けてくれてラクランはほっとした、どんなにあの機械人形の装甲が頑丈だったとしても、あんな隕石みたいな一撃が当たってしまえばなかの魔導カラクリはひとたまりもないだろう。
「……」
こんな事態だというのに機械人形の方は随分落ち着いて見える、表情が変わらないし、攻撃も仕掛けてこない、全く感情が読み取れない。
「なんだ…？あいつ、反撃しないのか…？」
スカートのような構造体をふわりと翻しドレスデンと十分に距離を開け、こちらをじっと見ている様子。
身の危険を感じても反撃しないなら、この人形に排除されるということはないだろう。なら次にラクランが考えるべきはいかにドレスデンの蛮行を止めるかということだ、あの人形がいつまでも大斧を避け続けられるとは限らない。
「ッらァ！だらァ！ごぉおおらぁああ！！！」
ドレスデンの怒声とともに大きな地響きがなり天井からぱらぱらとごみが降ってくる。
ラクランは冷や汗が止まらない、とにかく時間が足りない、このままでは目当ての古代技術がスクラップと化してしまう、なにか、なにか行動を起こさなくては。
「おいそこの人形！！！俺の後ろに隠れてろ！」
「……！」
ラクランは人形の少女を守ってドレスデンの前に仁王立ちしたのは咄嗟の判断だった、訳がわからなかったがそうしなくては、と思った。
大斧が巻き起こした風がぶおう、とラクランの顔面を撫で、大斧はラクランの眉間をかち割る寸前で動きを止める。
「酔っぱらい……こいつをぶち壊すつもりならまず俺からにしろよ…！」
「あァン……？んだと旦那ァ…！」
ラクランの歯は震えてガチガチと鳴っていた、凶器を振りかざした大男に対してラクランは丸腰の非戦闘員だ。
もちろん戦闘経験などないに等しい。
「コイツをやらせるわけにはいかない、お、お前と、戦うことになってもな…！」
「残念だけどよォ…そこをどいてくれねェと旦那ごとぶっ飛ばすことになるんだがよォ…！」
ドレスデンはずい、と斧を持ち上げると眼をギラリと光らせ凄む。
「ああやれ、好きにしろよ、そうなったら誰がお前に金

を払うんだ…！？」
ラクランは震える声で啖呵を切った、ここまで来たらもうどうにでもなれだ。
「……なんとか言えよ脳筋野郎」
「……だーーーッハッハッハッハッハ！！！！」
ドレスデンは急に殺気を引っ込めると耳が痛くなるほど馬鹿でかい笑い声を上げた、唾が顔にかかったラクランはぎゅっと眉を潜めしかめっ面をする。
「おいおいおいおいおい旦那ァ！俺ァ旦那がそんな根性ある野郎だなんて知らなかったぜェ、惚れ直したぜ旦那ァ、そんなにそいつが大事だっつーんならよ、先に言ってくれよ、なァ？」
「この遺跡に来る前に再三言ったはずだぞ、俺は！！」
ドレスデンはバンバンとラクランの背中を叩く。
ドレスデンは単純に身体を張る男が好きだった。だからラクランの気持ちは差し置いてこの一件はドレスデンにとってラクランの株を大きく上げた。
一方のラクランは後日背中にもみじのような跡を見つける羽目になるのだが、今のラクランには痛みよりも機械人形が無事で安心する気持ちが勝っていたので気づかなかった。
「…このことはギルドに報告するからな、お前の報酬は全力で割り引かせてもらう」
「観念してくれよ旦那ァ！？俺は旦那を守ろうとしただけなんだぜェ！？」
「どの口が言うか戦闘狂が！」
「…もし」
「「……！？」」
男同士のやかましい言い争いの中に鈴のように透き通った声が割り込み、二人はハッとして振り返った。
「お……お前…喋るのか……！？」
「ええ、マスター」
「マ…スター…？」
抑揚がない事務的な口調でラクランに話しかける、当のラクランはいきなり発見したばかりの機械人形にマスター呼ばわりされて困惑せざるを得ない。
「おめェ、旦那のことをマスターたァどういうことだ？」
代わりにドレスデンがずいっと身を乗り出し人形に凄んでみせるが、人形の少女はまるで興味がないのか、つーんとそっぽを向いてドレスデンには一瞥もくれなかった。
「どうか、私のマスターになって頂けませんか？」
機械人形の少女はキュイ、キュイと関節から駆動音を立て機械仕掛けの身体を低くするとラクランの手を取り、

恭しくもぎこちなく一礼した。
「な…なぜ俺がそんなこと？」
「私は目覚めたばかりでなにも分かりませんが……あなたに奉仕したい、それだけははっきりわかるのです」
奉仕したい、と言われラクランは勘づいた、この機械人形が兵器だったにしろなんにしろ、きっと人と対になって使われる存在なのだろう。
「あなたのお役に立ちたいのです」
「仕える……ってことは……俺がこれから祖国に帰るから付いて来いって言えばそうするのか…？」
「ええ、マスターの仰せのままに」
この人形の少女を運び出すのには苦労しそうだと思っていたラクランにとっては願ってもないことだった。
「…よし、許可する」
「……！」
機械人形の目が一瞬ぱっと見開いた、が、目元意外表情は微動だにしなかったのでラクランはそれが意味することがわからない。
「ではマスター、お手続きを」
「…お手続きだ？」
手続きだなんてこの人形は書類にサインでもさせるつもりなんだろうか。
手続きとか言われると、ラクランはギルドを介してドレスデンと契約してしまった出来事を思い出す、なぜか自然と肩に強張った。
「まずはこの私にご命名くださいませんか？」
「…命名」
「ええ、命名です、私はマスターの従者ですから」
言われてラクランはうーんと唸って考え込む、家畜も持たず機械一筋なラクランは命名などあまり経験がない。変な名前をつけて後ろに控える酔っぱらいに絡まれたりしても困る、ここは安全策でいこう。
「……セリア」
「…セリア、セリア……セリアですね、私はマスターにお仕えするセリアです」
セリアと名付けられた人形は何度か繰り返すが、やはり声に抑揚はない、無表情なままでラクランには一体なにを意図して話しているのかちっともわからない。
「ひねりがなくて面白くねェぜ旦那ァ」
「お前は黙ってろ」
どちらにしろ酔っぱらいは絡んでくるのだった、ちなみにセリアはラクランの初恋の人の名前だ。
「では、続けて」
「…まだあるのか」
「認証登録がございます」
「拇印と署名がいるなんて言い出すんじゃないだろう

な」
「似たようなものです、こちらに」
言うと、セリアはぱか、と口を開いた。
「……は……？」
松明の灯りを照らして覗き込むと、口の中には綺麗にそろった歯とピンク色の舌があるだけだ、しかしこんな見られにくい所まで人間と見紛うほどよく出来ているものだ。
「…口の中に、拇印を？」
「そのようなものです、指を口に入れて頂ければ…親指じゃなくても構いませんし、署名は必要ありません」
オーバーテクノロジーを詰め込まれて作られた機械人形のご利用の際には、口の中に拇印が必要となります。
ふざけているのか、ラクランはこの人形を作った古代人がどこかで見ていて笑いものにされているんじゃないかと思った。
「……食いちぎられるかもしれませんぜ旦那ァ…！」
「食いちぎりません、マスター」
「ああ、もう知るか！いいよやってやるよ！」
ラクランの本日二度目のヤケクソであった、この人形もこの用心棒も理解しようとするから理解できないんだ、噛みつかれる素振りがあったら引き抜けばいい、最悪指の一本くらいくれてやればいい！
「……うらぁっ！」
ラクランが意を決して人差し指を口腔に突っ込むと、セリアの口は成り立ての主の指先をぱくん、と咥え込む。
ラクランはぎゅっと目を閉じる、用心棒が言うように食いちぎられるなんてことこそないとは思うが、一体なにが起きるか……。
ぬりゅっ
（え……なんで濡れて……え……！？）
これは機械人形の口内はずだ、なのに生暖かいし、濡れている。見た目だけじゃなく、感触や温度まで人間の口内が完全再現したというのか。
「どうしたんでさァ旦那」
「いや……」
つむった目をゆっくり開くラクラン。
目の前には年頃の美少女が仮面が張り付いたような無表情で自分の指をしゃぶる冗談のような光景が広がってはいるものの、これ以上おかしなことは起きないようだ。
その少女といえば、ラクランの目を青い瞳でじいっと見つめている。
「…どうした、これで終わりなのか？」
「……」
人形の少女は指を咥えたままふるふると首を横に振って否定する。

「…参ったな、どうすればいい？あ、舌に拇印を押せってこと……な！？」
無茶振りに慣れてきたラクランが自嘲気味に言おうとした所で、指先の違和感に気づいた。
（な、これ、舐められてるのか…！？）
ぬるぬるした柔らかい舌が指の腹を刺激したり、くるくると指先の周囲を回転してくすぐったりしてくる。
「ん……ぷぁ……まふたぁ……」
そしてきらきらの銀髪を手でかき上げると、今度はきゅっと柔らかな唇をすぼめ、可動部をキュイキュイ鳴らして顔全体を使ったストロークを開始した。
「……ぢゅ、ぢゅ、ぢゅ、ぢゅぽ、ぢゅぽ！ぢゅぅるるるるれるるるる！」
「おいおいこいつァ…まるで商売女みてえじゃねェか…」
ドレスデンが呆気にとられている間もその視線は変わらずじっとラクランの顔を凝視したままだ、まるでラクランの反応を逐一見逃さないようにしているかのように。
ラクランはドレスデンが商売女などと言うものだからつい目の前の美少女が自分の股間に跪いて奉仕する姿を想像してしまう。
ぢゅっ！　ぢゅっ！　ぢゅっ！
（やばい、このままじゃ下半身がやばい…！）
「や…やめろ、もうやめだ！おい、とまれ！」
「…ぷぁ」
やっとかラクランを認証登録から解放したセリアの口からは、ラクランの指へてら、と銀色の糸が引いていた。
ラクランはつい奉仕を受けた指先の匂いを嗅いだ、無臭だ、この唾液っぽい粘液は一体全体なんなんだ？
「…いかがでしたか、マスター」
「いかがもなにも、お前は俺に恥をかかせようとしてるんだな？そうに違いないな？」
「いえ、セリアはマスターのお役に立ちたいのです」
「じゃあ今やったことの目的はなんだ？」
「マスターのお身体の一部を採取し、情報を登録しました」
「情報を…登録…」
「なァ…今の俺にもしてくれよォ…頼むぜオイ…！」
色々とこの人形に問い詰めてやりたいところだったが、今度はドレスデンが欲望に満ちた目つきで割り込んで来た。
「おい、だから黙っててくれって！」
「いやさズルイぜ旦那ァ、旦那だけいい思いしてよォ…！」
「……」
ドレスデンが歩み寄ろうとすると、人形の少女はぷい、

とラクランを盾にして隠れてしまう。
「おいおう無視と来るんかい人形の嬢ちゃん…いいぜェ、大人をコケにするってのがどういうことか、教えてやらァ！！」
ドレスデンは間にラクランがいるのにも構わず無理やり人形少女の口に何度も人差し指を突き出そうとする。
「おいだからやめろ！！そんなことしたら……ぶぇえ！！」
ラクランの口にぞっとするような野性味溢れる味が飛び込んできた。
「ゴェ、ゲェッホ、ゴホ！！お、お前、こ、コロス…いつか絶対コロス……！！」
「だーっハッハッハッハッ！！こりゃいい、今度は俺が旦那のマスターとやらになるってわけですかい！！」
「……」
やかましい笑い声が遺跡にわんわん反響する中、ラクランはドレスデンを雇ったギルドの依頼評価欄に「劣」より低いものがないことを恨みがましく思った。

◇◆◇◆◇

日が傾きかけ、黄金色のぎらぎらした日差しが三角屋根の煉瓦で覆われた木造の家屋群をまばゆく照らす。
「忘れられた遺跡」から最も近いその宿場町は、辺境なだけあって規模が小さくのどかで、地元住民はおおらかな性質の人が多い。
しかし、傭兵や行商人たちが集まる酒場はというと話は別だ、やれ今日はワーウルフを討伐しただの（追い払っただけだが）、胡椒が高く売れただの騒々しいったらない。
だが、ここにその中でも一際騒がしい二人組があった、というか、一人が一方的に声がでかいだけだが。
「でよぉ旦那ァ、一体これからどうするんでさァ！！！」
「うっさい、目立つだろうが…！」
酒が入ったせいでさらに一段階やかましくなったドレスデンに、ラクランが声を潜めて応じる。
ドレスデンはラクランからの依頼が達成されたことでいい気になり、がぶがぶとビールを流し込んで上機嫌、どこまでもマイペースだ。
「俺はここで悪目立ちするわけにはいかないんだ、わかるな…！？」
「折角一仕事終わって気持ちよく飲んでるってぇときになんで俺が旦那にんなこと言われなきゃなんねェ！？あ

ァわかったぞォ、人形の嬢ちゃんのことだなァ！？」
言うとドレスデンは酒場の床に転がった一抱えほどある麻袋を指差した。中には人形の少女が体育座りの格好をして収納されている。
ラクランは盛大なため息をつく、ここは反魔物領なのだから、うっかりあの機械人形の少女が見つかり魔物と勘違いされてしまったら一大事だというのに、この原始人のような男には全くもって危機感がない。
すぐさま討伐隊が編制され、主犯のラクランも共犯のドレスデンも言い訳する間もなく身ぐるみ剥がされ投獄されてしまう。反魔物領に住まう者にとって常識中の常識だ。
「おうおうそれでまずはよォ、その嬢ちゃんよォ…もがっ…！」
「その話をする時はボリュームを落とせ！…魔物なのかどうかって話だな？」
「あぁそれでさァ」
ラクランは周囲を見回した、ドレスデンは背丈が大きくて目立つが、かきいれ時の酒場なら声を抑えさえすれば「人形」というだけで内容までは勘ぐられまい。
「……たぶん、魔物じゃ、ない」
「ほう、そりゃまたどうして」
「……魔物のようにも見える…だが旅路で何度かわざと背中を見せたが、襲ってこなかった……これはただ指示に従うだけの機械人形だ、不可解なところは山ほどあるけどな」
「旦那ァ、いくら旦那が人形趣味だからって流石に油断しすぎな気がしますぜェ？」
「人形趣味は否定するとしてもだ、こいつのカラクリにはリスクに見合うだけの価値がある」
ドレスデンはへェ、と言って全く理解の伴わない相槌を打つと、またがぶりと酒を飲む。
「俺はこいつを祖国に持って帰る、それで分解したい」
「おォう、せっかく生け捕りにしたのにぶっ壊しちまうってのかよォ！！」
ドン、とジョッキをテーブルに叩きつけると酒が溢れてびしゃりとテーブルを濡らしたが、いつものことなのでラクランは無視した。
「まだ壊すと決まったわけじゃない、俺が信用できる機械工を集めてこいつを分析するんだ」
「俺は旦那みてぇな頭のいい人が考えることはよくわからねェけどよォ、そいつはちと可哀想なんじゃねェか？」
「お前がそれを言うか…！」
ラクランが小声で怒鳴るが、ドレスデンはでへへ、と反省の感じられない笑みを浮かべるだけだ、都合の悪いこ

とは耳に入らない性質らしい。
ぐび、とまた酒を煽ろうとするもジョッキが空だったので、ドレスデンは店員を呼びつけ追加の酒を注文した、この店に入ってからもう2桁を突破していた。浴びるように飲むというのはこういうことだろうな、とラクランは思った。
今日は奢りだから好きなだけ飲ませてやるといったらこの始末、この会合の記憶も残るかどうか怪しいというところだろう、頃合いだ。
「だからお前との契約もこれで終わりだな」
「んなァにィ！！？」
「いやめでたいなもっと飲め、旨いぞ！」
「んぐゥ！？」
ラクランは反論を聞く前に、このときのために事前に注文しておいたこの店で一番度数の高い酒を素早くドレスデンの口に流し込んだ。
「……んがァ…！」
ドレスデンは酩酊してどずん、と木製のテーブルに突っ伏すと、んごぉぉ、と地響きのような寝息を立てて眠ってしまう。
あとはそれとなく支払いを済ませてしまえばようやっとこの野蛮人から解放される。
（ギルドのブラックリストにはちゃんとのせとかないとな…！）
ラクランは人形の少女が詰まった麻袋を肩に担ぐと、足取りも軽く宿探しに向かった。

◇◆◇◆◇

木造の階段は随分年季が入っているらしく、踏む度にみしりと踏み抜くこと心配でならない音を上げ軋んだ。ほの暗い廊下を半ば手探りで進み、なんとかあてがわれた部屋にたどり着いたラクランがドアを開けると、そこは木目ばりの床とベッドがあるだけの質素な部屋だった。
予想通りといえば予想通り、壁はそこら中にカビやシミがあって薄汚れているし、薄ら寒い隙間風だって吹き込んでいる。
（ボロ宿……）
優雅な血筋と魔力に恵まれた勇者でもない限りは、実際の冒険というのは夢もかけらもないものだ。
ほとんどが資金と人間関係のやりくりに尽きる、価値のある宝物に巡り会えるなんて滅多にない。素人、いやプロにさえリスクが大きすぎる博打だ。それでもこうやっ

て目的を果たして宿に無事帰って来れたことをラクランは有難く思った。
丁重に麻袋を床に下ろしてラクランがするりと口ひもを解くと、中からきらきらの銀髪が覗く。
…さて、やかましい男がいなくなった今、この機械人形には聞いておきたいことがたくさんあった。
「…おい、もう出て来ていいぞ」
言いつけると、機械人形は体育座りの姿勢からそのまま直立に浮かび上がり、両手両足を広げて分厚いスカート状の金属装甲をふわりと展開した。
「お呼びでしょうか、マスター」
考えてみればこの人形の少女に詰まっている技術は凄まじい。自律動作・会話が可能で、浮遊して移動し、さらに古代から永い年月を経てもなお動く耐久性。
だが木造のぼろ宿の一室に、宙に浮かぶ得体の知れない古代文明の機械人形とは、ミスマッチも甚だしい。
「質問がある」
「なんなりと、マスター」
「まず、お前を作ったのは誰だ？」
「わかりません、マスター」
「む……じゃあ、お前はどういう仕組みで動いてるんだ？」

◇◆◇◆◇

製造者は誰なのか、いつ頃造られたのか、どうやって動いているのか、動力源はなにか、エトセトラ…。その類の質問は聞けども聞けどもこの人形の少女はわかりませんマスターの一辺倒だ。
さらに言えば自分の過去や生い立ちに関する記憶は一切持っていないらしい、ラクランに出会ってからのことだけを記憶しているのだと言う。
「……」
「…はぁ～……」
ラクランは無表情な人形を前にぐったり頭を垂れて盛大なため息をついた。
「セリアではお役に立てませんでしたか？」
人形少女はくいっと身体を傾けて主の目を覗き込む。
「…いい、お前が気にすることじゃない」
落胆を隠せない、折角会話できるというのに、ラクランは会話から超技術のブラックボックスの中身に迫れるような手がかりを一切得られなかった。
「じゃあ……じゃあお前にはなにができるんだ？」
「セリアは…マスターのお役に立つことができます」

「具体的には？」
「マスターにご奉仕するためなら、なんでも」
「なんでも、ねぇ…」
この機械人形から会話でラクランが知りたい情報を引き出すことはできそうもないことは思い知った。やはり分解してひとつひとつの機能を洗い出すしかないのだろうか。それはそれで機械工が本職のラクランには腕が鳴るところではあったが。
「…もう十分だ、俺は寝る」
堂々巡りなので、ラクランは今日のところは諦めることにした。冒険を終えたばかりで疲れている、きっと明日になればいい考えが浮かぶ。
仄かに灯っていたランプから火を消し、上着を脱ぐとラクランはさっさと床についた。
ゆっくり休もう、目的のものが手に入ったとはいえまだこの旅は長い。
この宿場町はラクランの祖国から遠い、この人形の少女を持ち帰るには何日にも渡る長距離馬車をチャーターしなくてはならない。
そのためには、この町で仕事を見つけて早く金を貯めなくては。
「勝手にうろうろするんじゃないぞ」
「はい、お休みなさいませ、マスター」

「…ああ、お休み」

◇◆◇◆◇

なんだかいい匂いがする。石鹸みたいな、でももっと心地よくて華やかな……きっと、女の匂い。
質素な十字の木枠がはめ込まれた窓から降り注ぐ日差しでラクランは目を覚ました。
ふわりとシーツに広がるセミロングの銀色の髪は朝日を反射して……銀色の髪？
そこでラクランは気がついた、隣で誰かが自分を見ている、変わらぬ無表情、どこまでも深く青い瞳。
（なんだこの美少女…自分が誘ったのか、いや違う……まさか、俺は例の人形と同衾してる！？）
「…は！？なんだお前そこでなにをしてる！？」
ラクランはベッドからがばりと飛び起きてそのセリアから距離をとった。
「はい、セリアはマスターの従者です、マスターのために添い寝を」
「そっ…添い寝…！？」
セリアはあたかもそれが当然のことであるかのように顔

色一つ変えずに答える。
「いかがでしたか？」
「いかがでしたか、じゃないだろ…！…どうしてそんなことを？」
もちろんラクランは昨夜この人形を抱いて寝ようだなんて考えなかった、そうなるとこの人形が勝手にベッドに侵入してきたということになる。
「マスターがいい気分でお眠りになれるようにと」
「子守の機能でもついてるのか？俺はどう見ても大人だし、どうしたらそれで一緒に寝ていいってことになるんだよ…」
ラクランは困惑した、この怪しい人形、命令を聞いてその通りに動くだけと思いきや自発的な行動も取るらしい。あの大男が言うように自分は油断しすぎなのかもしれない。
しかしこの人形の、主に造形の出来が良すぎるために、見た目は完全に朝起きたら見知らぬ女と寝ていた形になるので、滅茶苦茶心臓にかった。
「……っていうか…なんかいい匂いがするんだが…？」
匂いをたどるとセリアの銀髪にたどり着く、いやでも人形からこんな女っぽい匂いがするはずが…。
「マスターにリラックス頂けるよう、セリアは香を噴出することができます」
「…お前は人形なのにびっくり箱みたいな奴だな」
「褒めて頂き光栄です、マスター」
「…褒めてないんだけどな」
ふと違和感を感じた。この人形、昨日よりも幾分か身軽に見える。シーツをめくり人形の身体を見ると、昨日まであったはずの分厚いスカート状の装甲や歯車がない。シーツの中にあるのは素体だけのようだ。
「お前……装甲はどこへやった？」
「はい、マスターのお眠りを妨げないよう、取り外しました」
「取り外せたのかあれ…」
セリアはベッドの脇を指差すと、確かに木目の床にベッドに入るのに邪魔そうな装甲や歯車が丁寧に並んでいる。
「マスター、昨晩は素敵でした」
「…なんだと？」
「寝顔が素敵でした」
「……なにが言いたい？」
「そのままの意味です、マスター」
この人形は無表情な癖に、容赦なく人の心をかき乱そうとする。
でも、少なくともこの人形の行動のおかげで昨晩の会話よりもずっと情報が得られていることにラクランは気が

ついた。
（もしかしたら、直接問い詰めるよりもなにかやらせてた方が、こいつが何ができるかわかるかもな…）
危険さえないのであれば、人形の少女が考える「役に立つ行動」を取らせることで新機能を発見できる可能性がある。
少なくとも今朝は装甲を取り外す、香を出す昨日が見つかった。行動原理さえわかれば、ともすればこの機械人形がなんのために作られたのか推測できるかもしれない。
「……よく眠れたよ、たぶんな」
言ってラクランは手帳を取り出し、せっせと今朝の出来事を記録し出した。

◇◆◇◆◇

小さな皿の上に乗ったか細い蝋燭だけがこの宿備え付けの照明だ。
薄暗いとよりほぼ真っ暗なボロ宿の階段を上る太ももがピリピリと痛み、ラクランは顔をしかめた。冒険開けの身体に体力仕事はなかなか堪える。
ラクランの職業は機械工、本来であれば工房に篭って機械設計したりたまに水門の整備をしたりするのが仕事だ。
だがこんな田舎町ではそんな専門性が問われる仕事の需要などないに等しい。
自然と宿代を支払いながら故郷への馬車賃を貯めるため実入りのいい仕事を選べば、ラクランは貿易商の荷運びの手伝いなど肉体労働に身をやつすことになった。
ボロ宿とはいえ毎日となると宿代は嵩むし肉体労働では休息日なしに働けない、つまり金はほんの少しずつしか貯まらない。
「この調子だと故郷に帰るまで何ヶ月かかることやら…おい、帰ったぞ」
「お帰りまさいませ、マスター」
ラクランがボロ宿の一室に戻ると、麻袋の中から美しい機械人形の少女がひょっこりと顔を出した。袋から無表情美少女の首だけが出ている光景はだいぶシュールだ。
「寸法測るぞ」
「はいマスター、仰せのままに」
言うとセリアは装甲を外し、真っ白い素体だけの姿になった。
詳しく調べるには祖国の工房に置いてきた設備が必要だ、もちろん大荷物になるので冒険には持ってこれなか

った。でも紙とペンさえあれば今でも十分できる仕事はある。
「じゃあ、そのまま腕をぐるぐる回して見てくれ」
「わかりました、マスター」
パーツの長さの測定。関節の可動域、素材強度の確認。精巧で複雑なこの機械人形相手では、仕事の合間だけでは何日もかかりそうだった。ラクランは得られた情報を素早く手帳に書き込んでいく。
「板金の形状、これどうやって加工してるんだろう、興味深いな…」
ラクランは肘の関節を覗き込む。
「マスター、くすぐったいです」
「すぐ済む、我慢しててくれ」
「恥ずかしいです」
「……本当か？」
言ってラクランはセリアの顔色を見るが、恥ずかしいといいつつこの人形の少女は眉一つ動かさない。
超技術を持つ古代文明とはいえ、きっと人間の感情は再現できなかったのだろう。なのにどうしてくすぐったいとか恥ずかしいとか、本物の少女みたいなことを言わせる必要があるのか、これもそのうち検証していく必要があるように思えた。
指を曲げたり伸ばしたりして一本一本動かす。器用なものでセリアの指は第一関節までしかないのに命ずればペンを持てたし教えれば簡単な書き物もできそうだった。
精巧なことこの上ない。
「そのままグーパーしてみてくれ」
言われてセリアは指示通りやってみせる。見事な可動だ、一職人としてラクランは唸らざるを得ない。
「……あ、ちょっと待ってろ」
言うとラクランは雑嚢をごそごそと漁ると、潤滑油を取り出す。
「ほら、関節に挿してやる、こっち来てくれ」
「……っ！マスター、その、お気持ちはありがたいのですが…」
「ん？どうした？」
ラクランの手元を見るにつけ、手をぱたぱた振り珍しく否定的な態度を取るセリア。
「わがままを言って申し訳ありませんマスター、鉱物油は匂いが……なるべく植物油にして頂ければ」
「まあ、植物油もあるけどな…どうして？」
「マスターに、嫌われてしまいます…」
「匂いに、こだわりがあるのか…？」
「はい…夜、マスターのお眠りを妨げませんか…？」
別に鉱物油の鼻につんとくる匂いなんてラクランには日常だったが、確かに考えてみると、この人形少女は「マ

スターのお眠りのために」と毎日ベッドに潜り込んでくる。
むしろ見目麗しい人形少女が傍らにいる方がどきどきしてよく眠れなかったりするのだが、ベッドが鉱物油臭くなって不快に感じることを想定しているのかもしれない。
「わかったよ植物油にしてやるから…ほら腕上げろ」
ラクランは木の棒にぐるぐると布を巻きつけると、ポンポンと丁寧に摩耗が激しそうな可動部に植物油を塗りたくっていく。
「マスターはお優しいです」
「はいはい」
「セリアは、マスターのお役に立ちたいです」
そう言われたところで、宿の主人や客に見つかっても困るからラクランはセリアにラクランが帰るまでは麻袋の中に隠れて絶対に出てこないよう指示している。
セリアを作った何者かは、一体全体なんのために感情のない人形に人と話す機能なんかつけたんだろうか。先史文明は、機械を話し相手にせざるを得ないほど寂しがりが多かったんだろうか？
奇妙に思いながらも、ラクランは仏頂面の人形少女にちょっとした可愛げを感じてしまった。
「こうやってよく見せてくれてるだけでいい……十分お前は俺の役に立ってるよ」
「もっともっとお役に立ちたいのです」

◇◆◇◆◇

「マスター…」
鈴のように澄んだ、それでいて抑揚のない声。人形少女の声。
「セリアは…マスターのお役に立ちたいのです…」
何度も繰り返し聞いた台詞だ、今晩も布団に潜り込もうとしているのだろう。
「いつもマスターは働いてお疲れのご様子…いつもお辛そうです…ですから……」
人形少女は四つん這いでラクランの股ぐらの間からシーツに潜り込んだ。
「マスター…今宵は夜伽に参りました」
「なに…」
ラクランは寝ぼけていてよく聞き取れなかった、とにかく今は肉体労働で疲れていて、ゆっくりと寝させて欲しかった。
「マスターのお疲れは、セリアが癒やします…」

ラクランが惚れ込む精巧な作りの指で器用にラクランのズボンを下ろすと、その陰茎に指をかけた。
「マスター…マスター…マスター…」
うわ言のように繰り返しながらしゅに、しゅに、と擦るとみるみる内にラクランの陰茎はびぃん、天を突くように勃起した。
セリアも自覚はないが、結局のところセリアは魔物の一種だった。
魔物が人を食う、人を食わないからセリアは魔物ではない、というラクランの仮説は、そもそも「魔物が人を食らう」という部分が反魔物主義国家の情報統制に騙されたものなので間違いだ。
現魔王の魔力の影響を受けると、無機物さえ淫らな思考と技を持つ魔物娘と化す。
未知の古代文明が築いた魔導機械「オートマタ」であるセリアもまた例外ではない。奉仕の魔物「オートマタ」の手淫は、意識がはっきりしないラクランでも容易く勃起させてしまう。
「れりゅ…」
セリアが口を開けると、だらだらと液体が流れてラクランの剛直をてらてらまぶしていく。
セリアの口内から分泌される液体はまるで唾液そっくりだが、セリアの体内機関で生成された「ご奉仕液」だ。
それはひたすらに口内奉仕で主の陰茎に快楽を与え、精を搾り取るためだけに存在していた。
「準備できましたよ、マスター…」
「…ん……」
下半身の冷えにだんだんと目が冴えてきたラクラン。だがもう気づくには遅かった。
「はァむ…！」
「うっうぉ……！」
股間に生暖かいようなくすぐったいような刺激を感じてびくんと腰が浮いてしまう。しかし、それは人外の快楽のほんの始まりにすぎない。
ぢゅっ……ぢゅうぅ！ぢゅっ！ぢゅっ！ぢゅっ！
「のぉぉおおおおおおお！！」
性的奉仕のために洗練された、男性快楽のツボを決して外さない究極のストロークが無防備なラクランの陰茎を襲った。
「なんだ……なんだこれはぁあ…！！！」
熱と痺れで感覚が飽和してしまい陰茎がビリビリと麻痺している、快楽が行き過ぎて射精できない、股間が張り詰めて苦しい。
「ま、待って…待ってくれ…！離してくれ頼む…！！」
「……♡」
セリアはラクランの命令を聞かなかった、というより聞

けなかった。口内に広がるのは、一番愛しい主の、一番欲しかった、一番美味しい昂ぶりだ。
それに主はあんなに、息もできないくらい、喜んでくれている。
「……♪」
そろそろだ、そろそろ緩めてあげよう、たぶんこのくらい我慢させてあげれば、一番気持ちいい、気持ちよく射精してもらえる。
セリアはストロークを止め、ぷにぷにの唇をゆるく前後させて雁首をくすぐりながら精道をマグマが登ってくるのを待った。
「ああっ！！ああっ！！あぐああっ！！」
どくっ　どくっ　どくっ　どくっ　どくっ
ラクランの下半身から白濁とともに極限の快楽が解き放たれた。
感覚がなくなるほど刺激され、直前で止めらていたせいで、射精したあとも止めどころがわからないし雁首の刺激が射精を止めさせてくれない。
どくっ　どくっ　どくっ
ラクランは冒険に仕事にセリアの世話にで満足に性処理できていなかった、止まりそうにない射精感はラクランにとって幸福であり不幸でもあった。
防御する間もなく、寝起きの身体で人生最大級の快楽をモロに食らってしまいラクランの意識はぷっつりと途絶えた。

◇◆◇◆◇

ラクランが目を覚ますと、無表情な人形の少女の美貌がラクランを見ていた。
目覚めと同時に目に入ったその薄ピンクの唇に、ラクランは得体の知れない恐怖感を感じた。
ラクランが意識を取り戻したのを見計らい、人形少女が口を開く。
「いかがでしたか、マスター？」
いかがってなにが……と、ここで昨晩の出来事を思い出したラクランはベッドから飛び跳ねるように起き、ガサガサと四つん這いで壁際まで逃げた。
「セリアはマスターのお役に立てましたか？」
「お役に立ったか…だと…！？」
何事もなかったかのように問いかける仮面が張り付いたかのような表情の人形の少女が、ラクランにはひどく恐ろしい。
この人形は、満たして欲しいと言ってもいないラクラン

の性的欲求を満たそうとした、そして確か、止まれと言っても止まらなかった。
性的奉仕……機械に人間の下の世話までさせようなんて、技術はあるにせよ古代人のその思考は、禁欲を尊ぶ教団領出身のラクランにとっておぞましいにも程があった。
それにいくら魔物でないにしろ、人外に誘惑され欲情してしまうなど反魔物領では刑罰に値する。強制的に搾り取られてしまったとはいえ、ラクランは重い罪の意識に苛まれる。
「…お前なんか、ちっとも役に立たなかったとも…！」
「……っ！」
「誰があんなことをしろと言った、俺に人形趣味はない！！！」
ラクランは人形の少女を前に声を荒げて怒鳴り散らした。
「セリアは、マスターのお役に……」
「もういい！金輪際俺に近づくな！」
「……わかりました、マスター」

◇◆◇◆◇

雨脚はだんだん強まり、ごうごうと窓を打ち付けぼろい窓枠ががたがたと揺れた。外れたら部屋もこの本も水浸しになってしまう、どうにか持ってくれよ、とラクランは強く祈った。
今日は雨で仕事が休みになったので、読書灯をつけてラクランはぱらぱらと何度も読み直した専門書を読んでいた。
（言い過ぎただろうか…いや、所詮は機械人形で、俺の従者だ、言い過ぎるもなにもない…）
人形の少女の淫行を叱りつけてからもう数日が経過していた、当のセリアは言いつけ通りにラクランには決して近寄らず、反対側の部屋の片隅にぺたんと座っている。ときどきちら、と視線を感じるが、多少不憫に見えても自分の身の安全のためには仕方がない。
セリアに話しかけるのも、ラクランから測定などの用件があるときだけだ。
いきなり「奉仕」と称して性的処理を始めるなど、一体どこの世界の常識なのか。この人形はもはや信用ならない、ラクランはあるべき距離を保てたのだと痛感した。
部屋が一瞬だけ白昼のように眩しく染まると、数秒あとからぴしゃ、と重く鋭い雷鳴が響いた。
ゴト

なにやら部屋の隅から物音が聞こえたのでラクランが振り向くと、人形の少女がぶるぶる震えて仔犬のように縮こまっていた。
「どうしたんだお前？」
「いえ、マスター、なんでもありません」
本人はなんでもないというものの、ぶるぶる震えうずくまるその姿はどう見ても尋常ではない。
「なんだお前…もしかして…雷、恐いのか？」
「セリアはマスターに決してご迷惑はおかけしません」
無表情だが否定はしない…ということは恐いということか。ラクランは思わずくすっと笑ってしまう、この人形はおかしなことだらけだ、どこの世界に雷を怖がって震える人形があるというのか。
「…こっちに来い」
「セリアからマスターに近寄ることは禁じられています」
「いいから、許可する」
さっき距離を取って良かったと思ったばかりなのに、部屋の片隅で震える人形の少女があまりに哀れに感じたラクランはついセリアを呼び寄せる。
セリアはふわ、と浮かび上がりおずおずとラクランに距離を詰めた。
「なんで機械人形のお前が、雷なんて怖がるんだ？」
「…雷は、オートマタの故障の原因です」
「……ただごとじゃない！」
「あと、大きい音と、強い光も苦手です」
「苦手なもの、揃いも揃ってるな…」
聴きながらラクラン呆れ果ててしまう。
「じゃ、収まるまで、手、握っててやるから、ほら」
「は、はい…」
セリアの手を取ると、想像以上に震えている。相変わらず能面のような表情からは何も読み取れないが、ラクランには相当な恐怖感を感じている、ように見えた。表情がないから感情がない、という仮説はあながち真実ではないかもしれない。
仕方がないので、机を立ち上がってベッドに移動し、セリアを座らせて隣に腰掛ける。
「その様子なら、こないだみたいに俺を襲ったりできないだろうな」
元気づけようと軽く冗談を言ったつもりだったが、逆に少女は耳から生えた装甲をしんなりさせて俯いてしまう。
「本当に、申し訳ございませんでした、マスター…」
「反省しているなら別に構わない」
「……」
束の間の沈黙が主従の間に満ち、ざあざあと雨が窓を叩

きつける音だけがボロ宿の一室に響く。
「セリアはダメな従者です」
「…別に今は、気にしないでいい」
人形の少女は、どうやら猛省しているらしかった。ここ数日言いつけはきっちり守っているし、無表情でも、青い瞳の奥には反省の色が浮かんでいるような気がした。
「マスターはお優しいです」
「…俺も昔、雷が苦手でな…よくお袋にこうやってなだめられたもんだったっけ」
そのときはこうして、機械人形をなだめることになるだなんて思いもしなかったが。
「セリアにお袋はいません…マスターはセリアの全てです」
「はは、そりゃそうか、責任重大だな」
よく考えてみればその通りだ、この人形少女に過去の記憶はない、この人形少女にとっての人間とは、ラクランとドレスデン二人だけ。
もし、もしもこの無表情な人形少女の中に心が秘められていると仮定したら、彼女にとってラクランは親代わりのような存在かもしれない。
カッ、とまた雷雲の中に稲妻が光り、握りしめた機械の指にぎゅう、と力が篭もる。
「よし、よし……大丈夫、俺がついてる」
ラクランは人形少女の肩をそっと抱き寄せ、ぽんぽんと背中を叩いた。
「マスター、セリアはマスターのお手を煩わせるわけには…」
「お前は俺にとって拾い物のようなものだし、迷惑さえ掛けなければそんなに気負ってくれなくてもいい」
「セリアはマスターの従者なのに」
「なら、従者をいたわるのもマスターの仕事だろう」
瞬間、閃光と同時に耳をつんざくようなズドン、という爆発音にも似た雷鳴が轟いた。
「うお、だいぶ近くに落ちたな…よし、大丈夫、大丈夫だ、なんでもない、雷なんてすぐ止む…」
その雷はラクランとセリアの泊まるボロ宿の庭先の枯れ木を直撃し、木肌をじゅう、と赤く焦がした。
「マスター…」
空は禍々しくどす黒い雷雲にすっぽり覆われている、稲妻が消えれば部屋の中は本当に真っ闇だ。
だが部屋が闇に覆われるまでの間にラクランは見た気がした。仮面のように白く無表情なセリアの瞳から、はら、と涙がこぼれたのを。
「セリアはマスターをお慕いしております」

◇◆◇◆◇

落雷は、積乱雲の中で蓄積された雷の魔力が放出される自然現象である。
その威力は並の魔法使いの使う雷魔法より遥かに大きく、命中すれば只の人間であればよっぽど幸運でもない限り即死は免れない。
そうでなくたって、特に先進的な雷魔法で発展した古代技術の結晶ともなれば、雷が近くに落ちただけで十分、致命的な故障の原因となりうるのだ。
そう、不運にも。
この夜そのまさかが起きてしまった、分散した雷の魔力は静電気となり、濡れた大地と宿屋の床を伝ってセリアの精密な魔力結線を焦がしショートさせた。
栄華を誇った究極の魔導工学技術の叡智の結晶さえ、大自然の猛威を前にすれば時に脆く崩れ去ることがある。
これはただ、それだけの話にすぎない。

◇◆◇◆◇

雷雨、のち、快晴。
ちぎりちぎれの雲の切れ間から清々しい青空がのぞき見えて、水たまりが点々とする大地を照らしている。
昨晩は、なぜか雷を怖がる人形の少女を励ましてるうちに眠りについた。
油断したらなにをおっぱじめるかわからない人形少女ではあったが、マスターが全て、という言葉がラクランの心に妙に引っかかる。
主という立場に甘んじて言い過ぎてしまったかも、とぼんやり考え込んでいるうちに、ラクランはつい眠りが浅くなってしまっていた。
（日が…高い…）
「…って昼だ！！もう仕事じゃないか！」
ラクランはガバリと飛び起きた。今日は昼頃に町に到着する行商の荷運びだ、遅れたら賃金が減らされてしまう、最悪もう仕事がもらえなくなる。ともすればもう到着しているかもしれない。
「あ、マスター！やっと起きました！」
部屋の片隅から快活な声が聞こえた。昨晩はあんなに雷に怯えてぶるぶる震えてたっていうのに、立ち直りの早いやつだ。
「セリアからはマスターに近寄れませんが、机にお着替えとお荷物まとめておきましたのでどうぞ！！」

見ると机には確かに綺麗に折りたたまれた着替え一式と荷物がまとめてある。
「助かる、じゃあ行ってくる！！」
「マスター、今日は宿の朝食があるはずです、ご主人から受け取るのを忘れないでー！」
「ああ、わかった！」
「いってらっしゃいませ、マスター！」
寝起きの時間というのはどうしてこうも慌ただしく過ぎていくのだろうか、何者かの悪意すら感じるくらいだ。
でもあの人形少女のおかげで助かった、なんとか職場には間に合いそうだ。
あれ、でもと宿の主人から豆や芋を煮た簡素な朝食を受取りふと、出ていく瞬間にちらりと見えた人形少女の顔を思い出す。
（あいつさっき、笑ってなかったか…？）

◇◆◇◆◇

「マ、マスター……そんなにじっと見つめられると、照れちゃいますから」
「んむむむ……」
セリアは両手を頬に当て、乙女ポーズで頬をぽっと赤らめて恥じ入る。
ラクランは無事ぎりぎりで仕事に間に合いきっちりこなすと、夕方の日課となったセリアの観察・記録作業をしようとしていた。だがセリアの様子が普段と違うのでそれどころじゃない。
ラクランは不思議でならない、いつもこの人形少女は仏頂面で、なにを言ってもつまらなそうな抑揚のない口調をしていたはずなのに。
「なぁ、お前どうしたんだ？　どうしてそんなに、なんというか、表情豊かな感じに…？」
「セリアの顔がどうかしましたか？セリアはいつも通りのつもりですが…」
「いやだって昨日までそういう風に、笑ったりできなかっただろう…」
「もう情けない泣き虫従者はやめたんです、泣いててもマスターのお役には立てませんからね！」
セリアは心配いりませんから、と健気に拳を握りガッツポーズをして見せる。
「そ、そういう問題かあ…？」
狐につままれたような気分だ、声も、表情も今のセリアは朗らかで可憐な年頃の少女そのものだ。
ラクランにとって昨晩までのセリアは鉄壁の無表情で

淡々と命令をこなす、どちらかと言うと冷徹な印象だったというのに。
それもそのはずで、昨晩の雷の影響でセリアの主動力が故障し、魔物の魔力中心の予備動力に切り換わった。すると機械関節を直接的に魔力で細かく制御できるようになるため、セリアは表情豊かに、滑らかに動くようになった。ラクランにはまるで知る由もないことだったが。
「…やれやれ、じゃ、寸法測るぞ」
額に手を当ててラクランはため息をつく、この現象については追々考えるとして今は日課をこなすことにしよう。
「はい、マスター！今日は背中からでしたね」
セリアがくるん、と振り返ると、それに伴い分厚い金属スカートがまるで風に舞うかのようにふんわりと翻った。
「……俺は夢でも見ているのか…？」
「……？」
身体を動かすように命じると、今までは駆動音を鳴らしながら関節を曲げ伸ばしていたのにぎこちなさはもはや見る影もなく、滑らかに、可憐に動く。
ごしごし目を擦るが、人形少女は相変わらずにっこりとあどけない笑顔をラクランに向けるだけだ。
「どうぞ、マスター、私はマスターのお役に立ちたいんです！」

◇◆◇◆◇

「おかえりなさいませマスター、お疲れ様です」
「ああ、ただいま」
人形の少女はラクランが脱いだ衣服を受け取ってテキパキと部屋着を手渡す。黄昏時の金色の日差しが主の帰りをにこにこと喜ぶ従者の白い美貌を照らした。
ラクランとセリアは主従として新しい関係を築きつつあった。
セリアがあまりにも役に立ちたい、と痛切な表情でせがむものだから、最近はラクランの身の回りの世話を任せるようにしたのだ。
セリアからラクランに決して近づいてはならないという命令は、セリアがそのことを話題にすると泣きそうな顔をして謝罪することと、日頃の懸命な奉仕に免じてラクランが目覚めている間に限り撤回した。
「マスター、今日はお茶はいかがです？」
「ああ、頼む」
金策の甲斐あって、貯金をしながら嗜好品を買える程度

には経済的に安定してきたところだ。
セリアの学習能力は驚異的で、ラクランが紅茶を淹れる様子を一度見せただけで内容を理解し完璧に習得して見せた。
「マスター、今日も寸法の測定をするんですよね？」
「ああ、ちょっと休んだらな」
「……♪」
セリアはベッドに腰掛けると、小型の卓で紅茶を飲むラクランを楽しげに見つめる。
「……そんなにじっと見られたら落ち着かないんだが」
「……あ、はい、ごめんなさいマスター！」
セリアはラクランから情操教育にと与えられた童話を手に取り、開く。
（……ちらちらこっち見てるな……）
本で視線を隠したつもりで、上目遣いでこちらを見ているようだ、青い瞳が見え隠れしているからバレバレだ。
「…飲み終わったぞ」
言うと、セリアは待ってましたとばかりに立ち上がり、というより浮き上がり、氷上を滑るように接近するとラクランから食器を受け取った。
「あ…あの……セ、セリアはマスターのお役に立てましたか…？」
「ああ」
（やったぁ……！）
愛しの主からほめられ、セリアは心の底から湧き上がる奉仕の喜びを抑えきれずぎゅうと目をつぶる。
「マスター、セリアになんでもおまかせくださいね！」
「あ、ああ」
どんな些細な仕事を任せても、この従者はラクランが役に立った、と言うだけでまるで世界中から祝福を受けたかのように幸せそうだ。
（マスターはセリアの全て……か…）
あの雷鳴轟く晩のセリアの言葉だ、人に奉仕するべくして作られた機械の従者にとって、主人に褒められることは本当に世界の全てなのかもしれない。
「マスター、今日も寸法の測定ですか？」
「ああ、手帳を取ってきてくれないか？」
「んふふ、そう言われると思ってですね…はい！」
「ん、なに…？」
「中、見てください！」
人形少女からセリアの分析用の手帳を受け取ると、パラパラめくって中身を検分する。
「……これ全部…お前がやったのか…？」
「はい、マスターみたいにうまくできましたか…？」
「すごいな、すごいぞこれ…！でもどうやって…」
「鏡を見ながらがんばりました！」

手帳には、ラクランの計画表に従って、パーツの寸法とスケッチがきっちりと書き込まれている。ここ数日の間に何時の間にやら読み書きや算術、作図まで習得してしまうなんて、とんでもない学習能力だ。
流石に予定分全部終わらせているわけでもないようだが、自分でこれだけ進めてくれているのならラクランの手間はめっきり減るだろう。
読み進めていくと、ラクランはおかしなページの存在に気づいた。
ラクラン・カレラス　ラクラン・カレラス　ラクラン・カレラス　ラクラン・カレラス……
ラクランのフルネームの綴りが、ページ見開き一面にびっしりと書かれている。その次のページも、その次のページも…。
「これ、なんだ…？」
「あ！！！」
セリアは見られてはいけないものを見られてしまった、と言わんばかりに口元を覆い、目を泳がせる。
「これは……あのあのですね…！…文字の練習をしようと思ったらつい、ですね…」
「俺の名前を使ってか…？」
「…はいぃ…貴重なページを無駄遣いしてごめんなさい…」
「いやいい、よくやってくれたよ」
「……っ！」
「文字の練習がしたいのなら、予備の手帳をやるから使ってくれ」
「〜〜っ！ありがとうございます、マスター…！」
ラクランが無愛想な黒い手帳を手渡すと、セリアは嬉しさのあまり頬ずりした。
（マスターから、はじめての、プレゼント…♪）
でもまだまだ、とセリアは気を引き締めた。簡単に舞い上がってはいけない、マスターの従者なのだから。
「あの…マスター、寸法のお仕事がなくなったのなら、お時間、ありますか…？」
「そうだな、やることがなくなってしまった」
「なら、マスターのお仕事の疲れを癒やすために、ひとつご提案が…」
「話してみてくれ」
「あ、按摩…按摩は、いかがでしょうか…？」
「…なんだと？」
「いえいえ違うんです！そういう、変な意味では、決してなくって…！」
ラクランがほんのり眉を潜めかけたのを見て、手を胸の前でぶんぶん振ってセリアは必死で弁解した。
「按摩は身体の疲れを癒やすことができるんですよ…マ

スターが嫌なことは決してしません！人形趣味のないマスターにご無理をさせるわけにはいきませんから…！」
「…どこでそんなこと知ったんだ？」
「マスターから頂いた百科事典で…これなら、お役に立てるかもしれないって…」
「……」
ラクランは顎に手をあてると、数秒黙りこくって思案する。
この機械人形の小娘の奉仕の欲求はまるで留まることを知らないようだ、日がな一日ラクランに奉仕することばかり考えている。
この様子なら、きちんと意思疎通さえしていれば勝手に性奉仕をしようだなんて思わないだろう。
人外に劣情するなど、自分だけではない、家族、ひいては祖国の恥だ。だが、機械を自分のために働かせるだけと考えれば、一線を越えなければ問題ない。
「…重い荷物の上げ下ろしが多くてな、肩と腰が痛いんだ」
言うと、不安そうだったセリアの顔にぱぁっと光が指していく。
「そこだけ、頼む」
「ありがとうございます、誠心誠意ご奉仕しますね、マスター！」

◇◆◇◆◇

熱くも寒くもない、過ごしやすい気温の夜は、虫の声にや木目の壁から吹く隙間風すらも心地いい。
セリアの按摩を受けたラクランは、按摩という技を伝え聞いたことはあったもののこんなに、人生観が変わるほどのものとは聞いてなかった。
人間よりも少し硬い指先が絶妙な力加減で凝りをほぐす感覚は極上の一言。
セリアの「マスター、気持ちいいですかー」という頭がとろけそうなほど優しい問いかけも、すぐに按摩の刺激とともに怒涛のように押し寄せるぬるま湯のような眠気に押しつぶされて聞こえなくなった。
目を覚ましたら枕がラクランのよだれでびしょびしょになっているという有様。
「……はっ！」
「あ、マスター、お気分はいかがですかー…？」
少女の柔らかな口調は再びラクランの瞼を重くするが、なんとか目を開くと傍らに座るセリアが見える。
人形の少女は仕事を終え、ベッドに腰掛けてラクランの

様子を見ているようだった。
「…どこでこんな技を？」
ラクランは気だるい心地よさに包まれた身をなんとか起こすと、セリアに向き直り問いかける。肩、腰をぐいぐい回して確かめると、滅茶苦茶に全身が軽い。
「…どこでって言われても、マスターのご様子を見ながらなんとなく…ですかね？」
「なんとなくって…」
セリアの技能には、ラクランに教わった後天的なもののほかに生まれ持った先天的なものがあるらしい。
たぶん性的奉仕や按摩の技術などの主人に直接奉仕する技術は先天的に持っているものだ。
「セリアはマスターのお役に立てましたか？」
「あ、ああ…すごく…良かった、疲れがさっぱり消えた、本当に働いたあとなのかって感じだ」
「光栄です、マスター！…それで、ですね…？」
「なんだ？」
「セリアに…ご褒美を…頂けませんか…？」
セリアは指をつんつんと突き合わせて申し訳なさそうにラクランを見る。
「……ご褒美…？」
この従者が見返りを求めるなんてことは初めてだ。
いや普通の従者ならば見返りを求めて働くのは当たり前だが、食事も必要としない機械人形が欲しがる見返りとは一体なんだろう。
「俺が与えられるものならいいから、言ってみてくれ」
「あの…あの…怒らないで聞いて欲しいんですけど…」
言葉に詰まっている、よっぽど言い出しにくいことなのだろうか。
「マスターのお指を…お指を、舐めさせて欲しいんです」
「……」
ラクランは眉間にシワを寄せた。
舐めると言われて思い出すのは、甘美過ぎて、そして唾棄すべき夜の記憶。人形の少女に寝込みを襲われた夜。
「出会ったときにマスターのお指、舐めさせてもらいました…あのときのこと、なんだか忘れられなくて…マスターに怒られるかもしれないのにまた欲しくなって…ひぐっ……」
言いながらセリアの青い瞳にうるうると涙が溜まっていく、自分は今相当に恐い顔をしているらしい。
「ごめんなさい…わがまま言ってしまって…」
「…この間の俺の寝込みを襲ったことと関係あるのか」
「…はい、ごめんなさい…今は、やっちゃいけないことだってわかります…」
「ああ、いけないことだ」

セリアはびくびくとラクランの逆鱗に触れやしないかと身をすくませている。放っておいたら今にも泣き出しそうだ。
「…なんで俺の味なんかがそんなにいいんだ？」
「わかりません…でも、セリアはマスターのお味を感じるとすごく幸せな気分になるんです…」
「幸せな気持ち…幸せ、ね…」
ラクランはなぜかわからないが祖国の人々を思い出していた。
ラクランの祖国では幸せなど、追い求める以前に国家を統治する教団都合の出自や家柄で全て決まってしまう、決して自分の力では望んだ幸福にたどり着けない。
「やっぱりダメ、ですよね…人形趣味のないマスターに、決してご迷惑をお掛けするわけには…」
「…許可」
「……あはは、ごめんなさい忘れてくだ…さ…へ…！？」
「許可する、お前が俺に人形趣味なんかなくて、指舐めなんかで決して喜んだりしない、これはお前のためだけの行為だって自覚してるなら構わない」
「マスター…！」
「食いちぎったり、しないな？」
「滅相もないですマスター！？」
「はは、じゃあ好きなだけ舐めればいい、俺は本でも読んでるから」
左手を差し出すと、人形の少女は待ちきれなそうに跪き、人差し指を口に含んだ。
「まふたあの味がひまふ…♪」
頬を赤らめて恍惚としながら、少女の青い瞳はとろんと夢見るようにとろけていく。
この人形の少女は、機械のようでもあり、従者のようでもあり、子犬のようでもあり、思春期の少女のようでもあった。
ちゅぱっ　ちゅうう　ちゅううう
「…ん…くすぐったいぞ」
「ごめんらひゃい…あ、ここ血豆がありまふ」
「ああ、仕事がキツくてな」
「甘噛みはありでふか？」
「…節度を守ればあり」

◇◆◇◆◇

この町の夕焼けを眺めるのはもう何度目になるだろうか、結構な長期滞在になったがのどかな雰囲気は結構気に入っている。楽しい、宿に戻る足取りが軽い。

ラクランは上機嫌で日の落ちかける道を歩く。
帰ったら、人形少女が待っている、人形といえど「おかえりなさい」と言ってくれる、あどけない笑顔を向けてくれる。
ラクランは生きる希望のようなものを感じていた。もともと一人暮らしの孤独な職人だったラクランにとって、ラクランの従者を名乗るセリアの存在は随分な救いだった。
ラクランのことが全ての彼女に対して、ラクランにも責任感のようなものが芽生え始めていた。
一方で、雑嚢の中にある、ずっしりとした財布の重さがなぜかラクランの気分を沈ませる、中にはこの町で貯めた大量の金銭が入っている。
この町での生活はまだ旅の中間地点に過ぎない、金が貯まれば祖国までの馬車賃が貯まる、祖国に帰ったら、もともと俺はあの人形の少女をどうするつもりだっただろうか？
ラクランはくるりと踵を返すと、宿への道とは別方向の、町の中心部に向かって歩いていった。

◇◆◇◆◇

「ただいま！」
「あ、マスター！おかえりなさい、お待ちしておりました！」
木製のドアを開くと、人形の少女はぱぁっと花が咲くような笑みを浮かべてラクランに抱きついた。ラクランも優しく微笑み返してそれを受け入れる。
ラクランにはセリアに「セリアが幸せな気分になるためだけの」スキンシップなら節度を守っている限りは許可していた、その節度もだんだんと形骸化してきてこの有様となっている。
「マスター…今日は遅かったですね…セリアは心配しました」
人形の少女がわずかに顔を曇らせる。
「ああ、心配させてすまない、今日は市の方に行ってたんだ、ほら」
「あの、これは……？」
「カチューシャってやつだ、都にいる女の子とかがつけてるやつだそうだ、額に装甲がついてるお前でも付けられそうなやつを選んだんだ」
「わぁ！ありがとうございます！」
「お前も人形なんだから、こういう飾りがあるのはいいかもしれないと思ったんだ、他にも、ほら！」

ラクランは膨らんだ雑嚢から様々な品物を取り出す、爽やかな香りが評判の植物油、珍しい紅茶の茶葉、児童むけの学習書籍、新しい百科事典…。
「いつも従者のお前には苦労かけてるからな」
「マスター、これ全部、セリアのために…？」
「ああ、お前が喜びそうだと思ったんだ、従者をねぎらうのは主人の仕事だからな」
セリアはラクランがほんの少し褒めてやるだけで飛び上がりそうなほどに喜ぶ、いきなりで驚くかもしれないが、今日はどんな風に笑ってくれるだろう、ラクランはつい期待に胸を膨らませた。
「でも、マスター…」
しかし、ラクランに満面の笑みを見せてくれるはずの人形の少女の表情は明るくない。
「あれ…なんで…？」
「マスター…お買い物をしたことのないセリアにも、こんなに高そうなものを買ったら、今日のマスターのお給料が失くなってしまうことくらいわかります」
実際は1日分どころか数週間分くらいの蓄えが消し飛ぶような散財だった、ラクランの金銭管理を手伝っていたセリアもそれがわかっていた。
「それにマスター…マスターはどうしてそんなにお辛い顔をしてらっしゃるんですか…？」
ラクランの顔からぽろぽろと涙が溢れた。それを見て人形の少女は心配そうに、人形の指でラクランの涙を拭っていく。
「マスター…マスター泣かないでください、セリアはマスターの従者です、マスターの悲しみはセリアの悲しみです」
「ぐ……クソ、お、俺、なんでこんな、俺はお、お前の、主なのに…！」
「セリアが辛いとき、マスターは私のそばにいてくれましたよね…セリアはずっと、ずっとマスターのおそばにいますから…」
「俺は……俺はなんで…」
人形の少女がラクランの悲しみを慈悲深く包み込めば包み込むほどに、涙はなぜか止まらなくなった。

◇◆◇◆◇

下弦の三日月が青白く冷たい光で辺境の宿場町を照らす。
月明かり照らされ、美しい機械人形の白い肌と青い瞳は一層神秘的に輝いていた。

セリアは窓の外に光る星を見ながら主人が見せた初めての涙のことをずっと考えていた。ラクランから与えられた本を読んで、人が悲しいときや辛いときに涙することは知っている。
しかし、セリアにはラクランが悲しむ理由も、その癒やし方も見当がつかない。
どうして主人は急にあんなにたくさんの贈り物を買ってきたんだろう。どうしてセリアの顔を見ながら急に泣きじゃくったりしたんだろう。
どれだけ悩んでも主を案ずるひたむきな思いが機械仕掛けの心をきゅうきゅうと締め付けるだけだ。
（ああ…マスター…）
眠りを必要としない機械人形の少女に悩み事は辛い、ひたすらに逃げ場のない思いが堂々巡りをしてしまう。
（大好きなマスター…約束を破ってごめんなさい…）
セリアは浮かび上がると、音もなく主に距離を詰めた。
泣き疲れて眠ってしまった、愛しい主の寝顔、ゆったりした寝息。それはさらにセリアの心を焦がしていく。
ちゅっ
人形の少女は、つい禁忌を破りその柔らかな唇を主の寝顔に重ねてしまった。
（今日はこれだけ…これだけ…あんまり欲張ったらお腹が空いてきちゃうから…）
セリアは主と反対側の定位置に戻ると、また思考のループに落ちていく。
（お慕いしていますマスター、マスターの痛みはセリアの痛みです…マスターは人形趣味じゃないからセリアはマスターの痛みを癒せません…どうか…どうか、マスターが救われますように…）

◇◆◇◆◇

ガララ、と音を立てて街道から馬車がやってくる。
馬車を倉庫のすぐそばにつけ、荷車と御者台を分離すると、御者はぴしゃりと鞭を叩いてそのまま馬を厩舎へと連れて行った。
残された荷車を前にして、ラクランは魂が抜けたようにぼーっと突っ立っている。
「おい！おいそこの若いの！」
「……」
ラクランを呼ぶ禿げ上がった初老の男はこの荷積み場の親方だ。
親方は、この町に来て以来かれこれ数ヶ月は一緒に仕事をしているラクランの名前を覚えていない、忘れっぽい

というか、たぶん覚える気がない。
だいたいの青年を「若いの」呼ばわりするので呼ばれたときには誰のことかニュアンスで理解するしかない。
「呼、ば、れ、た、ら返事をせぇ！」
「痛！」
ラクランは親方からごちん、と頭を拳骨でぶたれた。
「おめぇ、これまでは真面目一辺倒って感じだったのに最近おかしいぞォ…？」
親方はラクランの顔をまじまじと覗き込む。
「さては女だな」
「女じゃない！」
ラクランは弾けるように振り返り否定した。
「ハーッハッハッ！からかって悪かったな若いの！」
バシバシと肩を叩くと、馴れ馴れしくラクランに肩を組んで来た。
「いいさいいさぁ、おめえみたいな堅物でも、女にかまけるとあっちゅうまにこれだっつうんだもんなぁ…！」
「はァ……」
いかにも人生の先輩といった面をして親方はラクランに「いいか、まず、男が先に謝れ」などと見当外れの忠告をくれる。
それを鬱陶しそうに「結構ですから」と振り払うと、ラクランは粛々と荷運びを開始した。
でも単調作業を繰り返しているうちに、気がつけばまた手が止まり物思いに耽ってしまう。
職人の修行で青春らしい青春のなかったラクランにとって、人形の少女との生活は眩しいほどに輝いていた。
最近は仕事をしているときでさえセリアの笑顔が思考を埋め尽くしていたくらいだ。健気な従者に家に迎えられ、労をねぎらう時間がラクランのなによりの楽しみになっていた。
しかし、この一時の生活を長引かせるために散財してしまおうという考えは決してあってはならない。
情にほだされて、人形の少女との日々と祖国の人々とを天秤にかけ、自分の幸せを選ぼうとした自分の弱さがラクランには許せなかった。
大国なれども希望なし――――ラクランの祖国はそんな国だった。ラクランの身近な人物は皆がなにか、大切なものを諦めた顔をして俯いていた。
それはいつまでも下がらない重税のせいか、家柄と見栄ばかり重んじる伝統のせいか、厳格な宗教軍事国家であるせいか。
ラクランはそんな祖国でも愛していた、親、親戚、友人に数え切れないほど世話になった、いつか希望に満ちた豊かな国に変わって欲しい、と願っていた。
しかし、どんなに実力ある勇者に恵まれていても、まる

で鉄鎖でがんじがらめに縛られたかのように、祖国を覆う閉塞感はちっとも晴れそうになかった。
ラクランの祖国には、時代を変革するような、何もかもを塗りつぶすような圧倒的な力が必要だった。
だからラクランは旅に出た、手がかりを掴んでしまった未知の古代文明のオーパーツ、それが祖国の窮状を打破する可能性に財産と命を賭けた。
果たしてラクランは付け焼き刃の冒険者としては相当に優秀だったと言える、幸運にもそのオーパーツをまんまと手中に収めることに成功したのだから。
だからこそ。
（俺は、こんなところで、つまずくわけにはいかない…！）
ラクランはぎゅうと血が出そうなほどに拳を強く握りしめた。
結局、どんなに寸法を測り、機能を発見し、挙動を観察したところで肝心なセリアの動力源や動作原理はラクラン一人じゃ複雑過ぎてわからずじまいだ。
だから次になすべきことは簡単だ、最初からわかっていたことだ、人形の少女を祖国に持ち帰り、分解し、パーツ1個1個の機能を大人数で分析して動作を解明する。
ラクランはセリアに対して芽生えかけていた感情が二度と開かないよう鍵を掛けた。
ラクランは、機械のような心が欲しかった。

◇◆◇◆◇

「ま、マスターおかえりなさい…」
「……」
ラクランはセリアの出迎えに返事を返さなかった。
俯いたまま部屋に入り、セリアが存在しないかのように一瞥もくれず備え付けの机に腰掛け、一言も発しない。
セリアはそんなラクランの様子を見て、所在なさげについてまわる。
「どうしたんですか、マスター？お身体の調子でも…」
「…お前には、感謝してる」
「え……」
唐突な感謝の言葉。セリアには主人の意図がわからず途方に暮れるしかない。
「でも……俺以外に拾われた方が良かったのかもな」
「そんなことありません！」
ラクランの目にはいつもの優しい光がない、それがセリアの心を言い知れぬ不安で満たしていく。
「悪かったな、俺、最初は機械のお前に感情なんてない

と思ってたんだ」
「でも、マスターは出会った頃からお優しかったです…！」
「ああ、気まぐれでな」
「気まぐれでも、セリアは幸せでした」
「幸せ…ああそうか、幸せか…じゃあ、俺がお前をいずれ分解するために手元に置いてただけだと言ったらどうする？」
ラクランの瞳は、セリアを捉えているようでいて、捉えていない。
「セリアのことを記録するのはマスターのお国のため…って言ってましたよね？」
「ああそうだ」
「…マスター、セリアは例えマスターに分解されてばらばらになっても、それでマスターのお役に立てるのなら構いません」
人形の少女は心配いらない、とばかりに笑ってみせた。セリアはラクランの役に立つためであれば字面通りなんだってする、根っからの従者だった。ラクランが分解すると言えば素直に身を差し出してしまうことだろう。そんな彼女があまりにも健気だから、つい心打たれてしまう、主として報いたくなってしまう、ずっと手元に置きたくなってしまう。

（でも、それでどうなる？故郷に置いてきた家族は？友人は？祖国の人々を差し置いて、俺だけ人形従者の世話しながらのうのうと暮らそうってのか…？）
ラクランの決意は固い、ラクランの高潔な精神は、弱い自分を決して許さない。
「そう言ってくれて助かる…じゃあ、これからお前を封印する」
「封印…？」
「麻袋に入って、俺の故郷に到着するまで出てこないと約束して欲しい」
「……っ！どうして…マスターのためならなんでもします、どうしてもマスターのおそばに居させてもらえませんか…？」
「悪いけど命令なんだよ…！…お前といると、俺、ダメになるから…！」
ラクランは苛立たしそうにドン、と机を叩いた、それはセリアではなくラクラン自身へ向けた苛立たしさだった。
「セリアでは、お役に立てないのですね…わかりました、ご命令に従います、マスター」
でも、とセリアは必死に笑顔を取り繕って付け加えた。
「マスターの痛みはセリアの痛みです、マスターの心が折れそうなときはどうか、どうかセリアをお呼び下さい

ね」

◇◆◇◆◇

田舎の街道は往来が少ないためか小石が多く、よく車輪が石を踏みつけて馬車が不規則にゴトゴトと揺れる。ラクランは足腰が痛くなりそうなほど窮屈な馬車の中で、生きているか死んでいるかもわからない表情でただ長旅の終わりを待っていた。
この馬車は相乗りではない、ラクラン専用にチャーターしたものだ、厳格な反魔物領で人形の少女の存在をちらりとでも人に見られるわけにはいかなかった。
あれからラクランは、自ら従者との束の間の幸せな日々に終止符を打った。与えたプレゼント、カチューシャや植物油、事典などは全て古物商に売り払った。
最低限必要な会話以外は誰とも口を利かず、がらんどうで妙に広く感じるボロ宿と荷積み場を往復する毎日。
長距離の馬車賃が払えるほどに金が溜まった頃には、ラクランの目元にはアンデッドも真っ青の深いクマができていて、御者にぎょっとされたものだった。
「……」
ラクランの傍らには機械人形が入った麻袋がある、でも決して中を覗き見ることはない。この中にあるのはラクランが決別すべき日々そのものだ。
もう主従であることをやめてしまった機械工と機械人形を運んでひたすらに馬車は進む。
ラクランの祖国、レスカティエ教国へと――――――――――――。

◇◆◇◆◇

馬車とはなんと便利な乗り物なのだろうか。
自分の意思で足を前に進めなくても、金さえ払えば自動的に目的地へ向かってくれるのだから。だから耐えるだけでいい、ただ耐えるだけで…。
ラクランは延々と不毛なことを考えていた。なぜか体感の時間は実際よりもやたら長く感じられ、長旅の疲れを一層重たくした。
これから故郷へ帰るというのに、まるで処刑を待っているかのような気分だった。歯の奥ががちがち震える、一体俺は何をそんなに怖がっているんだろう。
忘れなきゃ、そうだあれは、あの少女との生活はただの夢だったんだ、冒険疲れが起した白昼夢だったんだ。